

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 19 日現在

機関番号：32206

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23593330

研究課題名(和文) 月経周期に伴う育児感情尺度の開発

研究課題名(英文) Development of a Mothers' Childcare Emotion Scale Associated with Menstrual Cycle

研究代表者

濱寄 真由美 (HAMASAKI, MAYUMI)

国際医療福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：90352335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：

本研究の目的は、「月経周期に伴う育児感情尺度を開発」し、この尺度の信頼性と妥当性を検討することである。第1研究では、育児中の母親のフィジカルアセスメントと子どもに対する月経前症状を明らかにした。第2研究では、60周期の基礎体温表と20名のインタビュー調査より48項目の尺度を作成した。第3研究では、797名のアンケート調査より、主因子法・プロマックス回転の因子分析の結果、38項目5因子となり、信頼性の検討では、下位尺度にCronbach's .792～.935の高い信頼性が確保された。本尺度は、育児期の母親の月経前症候群の有無の診断に役立てることが期待でき、児童虐待予防に貢献できると考える。

研究成果の概要(英文)：

The objective of this study is to develop a "Mothers' Childcare Emotion Scale Associated with Menstrual Cycle" and to examine the reliability and validity of the scale. In the first study, physical assessment of childrearing mothers as well as premenstrual symptoms associated with their children were made clear. In the second study, a 48-item M-Scale was constructed based on 60 cycles of the Basal Body Temperature Chart as well as the survey by interviewing 20 mothers. And in the third study, based on the questionnaire for 797 subjects, the promax rotation as principal factor analysis converged the number of items and factors into 38 and 5 respectively, and the examination of reliability confirmed a high level of reliability in its subscale Cronbach's .793～.935. This scale can be expected to help diagnose whether or not a child rearing mother has premenstrual symptoms, and to contribute to the prevention of child abuse.

研究分野：助産学

キーワード：PMS 尺度開発 育児期

1. 研究開始当初の背景

欧米では、月経前の時期に母親の児童虐待が増加する事などから、月経前症候群(以下 PMS という)は臨床的のみならず社会的にも注目されている児童虐待リスクである(Dalton, 1998; Lewis, 1990; Rittebhouse, 1991)。PMS の発生機序は、多岐にわたる要因が密接に関与し、非常に複雑であり、現在も不明な点が多い。そのため海外文献・国内文献においても主に病態・診断・治療法に関する研究が大多数をしめている。American Society for Reproductive Medicine (1997) が示す「PMS 患者のためのガイドブック」によると、精神症状 9 症状・身体症状 14 症状・行動における症状 12 症状を示しているが、症状の発生頻度と母親の子どもへの精神症状・行動における症状の変化は示されていない。また、出産を契機としてセロトニン作動性機能の変化が生じる女性たちがいることが示唆され、母親の出産後からの月経前症状に着目していく必要がある(Erikson・Hedberg, 1995; 松本, 2004)。さらに、出産後のマタニティ・ブルーと産後抑うつ症の既往がある人においては、新たな PMS の発症の予測要因のひとつであるという報告がある(Dalton, 1987・1998)。

現在、我が国においては、「健やか親子 21」の啓発運動以降、児童虐待の要因である産後うつ病に対する関心が高まり、自治体のみならず地域の周産期医療保健機関の間でも、産後 1 カ月～産後 3・4 カ月位までエジンバラ産後うつ病自己質問票 (EPDS) スクリーニングの取り組みが活発になっている。しかし、出産後の月経開始は、7 か月以降が多いので、PMS の女性の発見が出来ない。一方、育児に関連したストレスを定量化する尺度も開発されている。(佐藤, 1994・日下部, 1999・Abidin, 1995)しかし、すべての研究において PMS をストレスとしてしている研究はない。出産後、新たに PMS の有無を診断していく

ことは、乳幼児をもつ母親に対する精神的健康面でのケア継続を図ることになり、虐待リスクファクターの第 1 次スクリーニングとなる。

2. 研究の目的

本研究は、0 歳児～6 歳児までの母親のフィジカルアセスメントを行い、月経前の子どもに対する症状の診断のために、「月経周期に伴う育児感情尺度」を開発する。

具体的には、以下の 3 つである。

(1) 育児期の母親のフィジカルアセスメントと子どもに対する月経前症状を明らかにする。(研究 1)

(2) 「月経周期に伴う育児感情尺度」(暫定版)を作成する。(研究 2)

(3) 育児期の PMS を診断する「月経周期に伴う育児感情尺度」(暫定版)の信頼性と妥当性の検討を行う。(研究 3)

3. 研究の方法

【研究 1】

育児期の母親のフィジカルアセスメントと子どもに対する月経前症状を明らかにする。

【対象者】

(1) 母親の年齢は、20～44 歳とした。

(2) 基礎体温表が 2～3 周期記載できた母親。

(3) 基礎体温表より月経前症候群を有する事が診断できた母親。

(4) 重症な精神疾患の既往がない、または治療中でない母親。

(5) 既往症がない

以上の 5 点の条件を満たした母親 20 名とした。

【分析方法】

(1) 基礎体温表(PMS メモリー)により、月経前症候群の有無を判断した。

(2) 月経前症候群と診断された母親の月経前期における症状の発生頻度と、重症度の把握をした。

基礎体温表(PMS メモリー)に記録された症状のレベル 1～レベル 3 の重症度につ

いてレベル1（症状は少しあるが日常生活には影響なし）を1点，レベル2（日常生活に影響する程度にある）を2点，レベル3（はげしい）を3点と得点化した。さらに，周期毎に月経前期のおののくに記録されている月経前の14日間すべての身体症状，精神症状，社会症状について発生頻度と重症度とによる累積総和値を算出した。

（3）基礎体温表より月経前症状の変化の比較を行った。

（4）Berelson，Bの内容分析の手法に基づき以下の手順で行った。

逐語録より，母親が語った月経前の時期のストレス対処過程に関わるストレスと対処様式とソーシャル・サポートにかかわる体験が表現された文脈を抽出してデータ化し，記録単位とした。

【結果】

月経周期に関連した月経前症状を基礎体温表（即時記録）により明らかにし，月経前症候群と診断した0歳児から6歳児を持つ母親のストレス対処過程について，LazarusとFolkmanのストレス理論を用いて質的に探索した。その結果，月経前症候群のある母親に対して，よりよい月経前の対処方法を考える事ができた。

（1）基礎体温表からみる月経前の身体症状で最も高率で発症しているのは，「眠くなる」，「肩こり」，「疲れやすい」，「頭痛」，「下腹痛」であった。

（2）基礎体温表からみる月経前の精神症状で最も高率で発症しているのは，「イライラ」，「怒りやすい」，「気分を抑制できない」，「攻撃的になる」であった。

（3）基礎体温表からみる月経前の社会症状で最も高率で発症しているのは，「一人になりたい」，「子どもがうるさい」，「物事がめんど

うくさくなる」，「家族や友人への暴言」であった。

（4）月経前症候群と診断した0歳から6歳児を持つ母親のストレスは，【子供の発達・病気・いじめに関する懸念】，【孤独な育児に対する懸念】，【子どもによる負担感】，【育児への自信のなさ・体調に対する懸念】，【幼児期に刻印された体験による影響】，【月経に関する影響】，【夫の存在/仕事/サポートに対する懸念】，【実家/義父母との関係に対する懸念】の8つのコアカテゴリーに分類した。

（5）月経前症候群と診断した0歳から6歳児を持つ母親のストレス対処様式は，情動中心の対処が，【家族への否定的感情の表出】，【感情の抑制】，【家族・友人からの逃避願望】，【医療機関の受診と相談】，【気分転換活動】の5つのコアカテゴリーに分類した。問題中心の対処は，【月経前症候群に対処するための動機づけ】，【日常生活の見直し】，【自分らしさを取り戻す行動】の3つのコアカテゴリーに分類した。

（6）月経前症候群と診断した0歳児から6歳児を持つ母親のソーシャル・サポートは，手段的サポートの【義父母/実父母/他者の育児サポート】，【夫の育児サポート】，【月経前・月経中の夫の育児サポート】，【子育て支援の情報提供】の4つのコアカテゴリーに分類した。情緒的サポートは【夫の情緒的サポート】，【実母/産婦人科医師の情緒的サポート】，【夫の評価的サポート】，【実母/助産師/友人の評価的サポート】の4つのコアカテゴリーに分類した

【研究2】

「月経周期に伴う育児感情尺度」（暫定版）を作成する。

尺度の質問項目は，0歳から6歳を育児中

の母親 20 名の基礎体温表 60 周期の症状と、「月経前症候群と診断した母親の質的研究」より得られたインタビューより得た調査結果と文献検討をから選択した。尺度項目は、48 項目からなり、回答は 5 件法であり、月経周期に伴う育児感情の変化が測定される

【研究 3】

育児期の PMS を診断する「月経周期に伴う育児感情尺度」(暫定版)の信頼性と妥当性の検討を行う。

【対象者】

末子の年齢が 0 歳から 6 歳の乳幼児を育児している 20 歳から 44 歳の母親で、出産後月経の開始している母親を対象とした。

【分析方法】

質問項目に 1 割以上の無回答がある質問紙は分析から除外した。記述統計を算出し因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。信頼性の検討には Cronbach' 係数の算出、折半法(Spearman-Brown の公式)を行った。分析は統計ソフト SPSSversion21.0 を使用し、統計の専門家のスーパーバイズを受けた。

【結果】

(1) 調査用紙は 1640 名に配布し、回収は 878 名、回収率は 53.5%であった。そのうち、母親の年齢が 45 歳以上の 29 名、月経のない母親の 2 名、月経前症状の未記入 42 名、質問項目 1 割以上の無回答がある質問紙の 8 名の 79 名を分析から除外した。有効回答は 797 名となり、有効回収率は、48.5%となった。20 歳未満の母親の対象はなかった。対象の属性は、母親の平均年齢が、 34.65 ± 4.8 歳(20 歳~44 歳)であった。子どもの数の平均は、平均 2.08 人(1 人から 4 人)であった。子ども年齢は、末っ子の年齢は、0 歳は 83 名(10.4%)、1~2 歳は 277 名(34.8%)、3~6 歳は 429 名(53.8%)であった。就業状況は、職業あり 535 名(67.1%)、育児休暇中 45 名(5.6%)、専業主婦 205 名(25.7%)で

あった。家族構成は、核家族が 662 名(83.1%)、拡大家族が 106 名(13.3%)であった。母子家庭の核家族が 15 名(1.9%)、母子家庭の拡大家族が 14 名(1.8%)であった。月経前症候群の有無は、ありと判断した母親は 454 名(57.0%)、なしと判断した母親は 343 名(43.0%)であった。

(2) 育児期の月経前症候群診断尺度」の因子構造は、第 1 因子は、「月経前は気分を抑制できない」など 10 項目で構成され、「月経開始前の子どもを中心とした否定的感情」と命名した。第 2 因子は、「月経開始後は育児が楽しいと感じる」など 10 項目で構成され、「月経開始後の肯定的感情」と命名した。第 3 因子は「月経開始後は夫がいたわってくれる」などの 6 項目で構成され「月経開始前後の夫(パートナー)のサポート」と命名した。第 4 因子は、「月経前は育児が面倒くさくなる」などの 10 項目で構成され「月経開始前の否定的な社会症状」と命名した。第 5 因子は、「月経前は頭が重い」などの 4 項目で構成され「月経開始前の身体症状」と命名した。

(3) 信頼性の 件数は 0.792~0.935 であり、折半法では、 $p = .742$ であることから、信頼性は概ね確認できた。

(4) 基準関連妥当性として、子どもの側面と母親の側面の育児ストレスを診断する既存のアセスメントツールである「PSI ショートフォーム」と「月経開始前の否定的な社会症状」との間に $r = .50$ と比較的強い正の相関が得られた。「夫とのソーシャルサポートスケール」との相関は、月経開始前後の夫のサポート」との間に $r = .50$ と比較的強い正の相関があったことから、構成概念妥当性を概ね支持する結果を得た。

4. 研究成果

本研究では、「月経周期に伴う育児感情尺度」を作成し、779名の母親においてその信頼性と妥当性の検討を行った。

第1因子である【月経開始前の子どもを中心とした否定的感情】と、第2因子である【月経開始後の肯定的感情】と、第3因子である【月経開始前後の夫（パートナー）のサポート】第4因子である【月経開始前の否定的な社会症状】と、第5因子である【月経開始前の身体症状】という38項目第5因子より構成された。

本尺度は、信頼性および妥当性について確認でき、本尺度の活用により、育児期の母親の月経前症候群の有無の診断に役立てることが期待でき、月経前症状の強い母親に対しては、食事療法・運動療法・ストレスマネジメントのセルフケアを促す尺度の有用性が示唆された。

今後は、「月経周期に伴う育児感情尺度」の短縮版を作成し、健康教育の前後で尺度を活用し評価していきたいと思う。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

濱寄真由美：月経前症候群を有する母親のストレス対処過程，第54回日本母性衛生学会学術集会，2014，10，3-4，大宮ソニックシティ(埼玉県)

濱寄真由美、常盤洋子：月経前症候群を有する母親の対処方法とソーシャル・サポートに関する研究，第52回日本母性衛生学会学術集会，2011，9，29，国立京都国際会館(京都府)

〔図書〕(計 1 件)

齋藤益子編集，濱寄真由美分担執筆：性の健康と相談のためのガイドブック，中央法規，189-190，2014

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://www.pms-iruka.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

濱寄 真由美 (HAMASAKI MAYUMI)
国際医療福祉大学・保健医療学部・准教授
研究者番号：90352335

(2) 研究分担者

常盤 洋子 (TOKIWA YOKO)
群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：10269334

齋藤 益子 (SAITO MASUKO)
帝京科学大学・医療科学部・教授
研究者番号：30289962

(3) 連携研究者

なし